

「十二人の怒れる男」

原作…レジナルド・ローズ

上演台本…永妻晃

ビッツ 1

1、5に話しかけている。

3 「どう、面白い裁判だったね。殺人事件どう？」

5 「どうとは？」

3 「だってさ、暴行事件や強盗なんかじゃ退屈じゃない」

2 「さっさとやろうぜ！ ヤンキース戦の切符があるんだ」

1 「みなさんはじめます！」

2 「ほら、早いとこ済まして帰ろう」

4 「父親を殺すなんて最低な野郎だな」

1 「ええ、評決の出し方はみなさんにお任せします、先に議論して投票するとか、それとも投票が先でもいいです」

4 「まず、投票しましょうよ」

2 「賛成、それが手っ取り早い（バットを振る仕草で野球の真似）コーン、やった場外ホームラン」

1 「では投票しましょう。これは第一級殺人で有罪の評決を出せば被告は死刑です。有罪、無罪どちらの評決でも全員一致が条件です……いいですか、では有罪の人は手を挙げて……」

一同、ばらばらに挙手をする。

5だけ、手を挙げない。

挙手をした者たちが5を注視する。

1 「(ざっと見て) 有罪が十一人……(一応確認) では無罪の人は？」

5、手を挙げる。

1 「無罪が一人」

ビッツ 2

2 「ふん、どこにもへそ曲がりがあるぜ……どうする？」

5 「話し合いましょう」

1 「無罪だと思うんですか？」

- 5 「さあ」
- 1 「“さあ”とは？」
- 5 「解らないということですよ」
- 4 「法廷で聞いたろ、アイツは人殺しなんだよ」
- 5 「まだ、十八歳ですよ」
- 3 「でも、父親の胸を10センチも刺したんだぞ」
- 4 「それに山ほどの証拠もある」
- 1 「どうしたいんです？」
- 5 「だから、話し合いましょよ」
- 2 「何を話すの、十一人が有罪だって言ってるんだぞ」
- 3 「あいつの話信じるの？」
- 5 「ただ、私が有罪に投票するとあの子は死刑です……」
- 4 「私は気を変えないですよ」
- 5 「変えろとは言ってますよ。人の生死を五分で決めて、評決が間違っていたらどうするんです？」
- 2 「時間は関係ないだろう。直ぐ決めて何が悪いの？」
- 5 「一時間話し合いましょ。野球の試合開始は八時でしょう」
- 2 「……それもそうだ」
- 1 「みなさんご意見は？」
- 4 「よし分った、話し合おう！」

ピッツ3&4

- 5 「いいですか……被告の少年は悲惨な人生を送って来ます。スラム街に生まれ、九歳で母と死別しています。父親が文書偽造で服役して、その間彼は福祉施設に預けられていた。不幸な幼年期を送っています」

- 2 「それがどうしたっていうの？」

- 5 「あんなに乱暴な人間になったのは毎日殴られたからだと思います。だから少しは考えてやってもいいのではと私は言いたい」

- 2 「俺たちは奴に借りはないぜ、ちゃんと裁判も受けてる。それに奴は大嘘つきだ！」

- 3 「ちよつと落ち着いて……あなたさ、何故彼が無実なのか

言って貰えますか？」

4 「いいですか、私は彼の証言から有罪だと思った。つまり彼の言葉に無罪の証明がない」

5 「有罪こそ証明が必要でしょう」

4 「でも、目撃者がいるんだよ」

3 「そうだよ、これは個人的な感情じゃないの、事実なんだよ。まずその一つ……下の階に住んでいる老人が夜中の十二時十分に争うような音を聞いている。そして奴が“殺してやる”と叫んだ直後に人が倒れるような音がした。警察が駆けつけると父親が死んでいたんだ。死亡時刻は同時刻頃……これが事実、現実ね。まだ十八歳なのは同情するけど罪は償わないとな」

4 「それに少年の話にはね、信用できないところがある。映画を観ていたと言ってるけどさ、題名も俳優の名前も覚えてないし、映画館で目撃もされていの」

1 「向かいの女性の証言が何よりの証拠だと思いますよ。彼女は少年が人を殺すところを見ているんです。いいですか女性はこの猛暑で寝るに寝られず窓の外を見ていて被告が父親を刺すのを見たんです。時計は十二時十分を指していました。それに被告とは顔見知りです」

5 「しかし高架鉄道を挟んだ向かいの部屋ですよ。電車も通過していたし」

1 「乗客は乗っていなかった。部屋から電車の向こうは見えると証明されています」

ビッツ 4

4 「私は動機を考えてみました。とても大事ですから、人は動機もなく人を殺しませんからね。少年の隣人たちの証言があつたでしょう。少年と父親は喧嘩していた、夜の八時頃です」

5 「そうです。二人は口論して父親が少年を二回殴った。そして少年は怒って出て行った……」

4 「それが事件の一部だつてことです」

5 「それが強い動機につながつたとは思えないですね。少年

は小さい頃から何度も殴られていて暴力は生活の一部です……たった二回殴られて殺しますか？」

3 「限度だったかもしれないですね」

2 「奴は黒に決まってるだろ。前科を見なよ。教師に石を投げて少年審判かけられ、十五で施設送りだ。ひったくりとナイフの乱闘で逮捕。ナイフは名人だそうだよ」

5 「家庭環境のせいです」

3 「そのために事件を犯したとしても犯罪は犯罪でしょ、有罪じゃないんですか？」

1 「何故そう言ったのではなく。スラム街は犯罪の温床おんしょうです。そんな子供は社会の脅威になる可能性があります」

2 「スラム街の奴らはクズだよ。社会に必要な……」

5 「……すみません。私もスラムの出身です。ゴミためて遊んだから今もくさい臭いがするかも知れませんが、だからといって彼の見方をする訳でもありません。私はただ正しい評決を出したいだけです」

一同、黙る。

ビッツ 5 & 6

5 「聞いてください……私もこの事件は皆さんと同じく彼が有罪に思えます。法廷の六日間の証言を聞いてきました。しかし、その証言の中に確かな証拠はないと思います。ですから。弁護人も充分に反対尋問をしていません。すべてに見逃しが多過ぎます」

4 「質問なんかしたら、余計不利になるからじゃないんですか？」

5 「少年の立場で考えましたが……私なら弁護人を替えますね。命がかかっているんだから。検察側の証人を叩きめして欲しい……犯行を見た証人は一人だけで、もう一人は声を聞いたとか状況証拠だけなんです。検察側の証人はその二人だけ……もし、間違っていたら？」

3 「間違える？」

5 「人間は間違いを犯すものだ」

3 「間違っていない」

5 「絶対に？」

3 「絶対なんてあるわけない！」

5 「そのとおりです」

3 「……」

一同、黙る。

ビッツ6

2 「……肝心な話をしよう。いいか、父親の胸に刺さっていたナイフは……ご立派な少年が犯行の夜に買ったと認めている」

5 「ここにありますか？」

1 「ちよつと待って、用意させます」

1、ドアの所に行つて、係員に何か言っている。

4 「ナイフは重要な証拠ですからね」

5 「そのとおりです」

4 「では順に考えましょう。父親に何度か殴られて……」

3 「二回」

4 「二回殴られて、午後八時に少年は家を出た。そのまま中古店へ行きナイフを買った」

3 「飛び出しナイフ」

4 「飛び出しナイフを買った。普通のナイフじゃない柄えに珍しい模様がある……店の主人も“あんなナイフは初めてだ”と言っている。午後八時四十五分少年は友人と会った……ここまで合ってます？」

5 「ええ」

4 「一時間ほど喋っていて、友人もそのナイフを見ている。少年は午後十時に帰宅。ここから検察と少年のはなしが違ってくる」

3 「そうだ、少年の話では十一時半に映画を観て午前三時十分分に帰宅し逮捕されたと」

2 「刑事に階段から突き落とされたとも言っている」

4 「で、飛び出しナイフは映画へ行く途中で落とすと言っている。以来見ていないと」

2 「そう、そこが怪しいな」

4 「映画へは行かなかったと思うね」
3 「彼が外出したのを目撃した者はいないし、題名も覚えていないんだから……」

1、ナイフを係員から受け取ると戻って来る。
4 「本当は家に居て、また父親と喧嘩してさ、刺し殺して午前十二時十分に家を出たんだよ。指紋まで拭きとってさ……本当にアイツがナイフを落としたとあんたは信じてるの？」

2 「たまたまそのナイフを拾った人間が少年の家で父親を刺したとでも言うのか？」

5 「誰かが似たナイフで刺した可能性ならあるでしょ」
1、一同にナイフを見せる。

1 「見て下さい……本当に珍しいナイフですよ」

2 「見ての通りだ、そんな偶然がある訳ないだろ？」

5 「可能性はありますよ」

2 「奇跡でも起きない限りねえよ！」

5 「……じゃ、これは？」
と、同じ絵柄のナイフを一同に見せる。

一同、騒然。

ビツツ

3 「同じだ？」

4 「これを、どこで?！」

5 「昨夜、少年の家の近くの質屋ゆっぺで買ったんです……六ドルでした」

1 「同じ様なナイフで誰かが父親を刺した？」

2 「ありえる訳ないだろ！」

5 「さあ、どうでしょう。現にこうやって同じナイフが眼の前にあるじゃないですか」

4 「しかし、確立は低いですけどね」

2 「こうなったら評決不能にしようぜ、疲れた。必ず再審で有罪になるさ」

5 「恐らくね」

2 「一晩中ここに居る気かよ？」

- 5 「人の命がかかってるですよ」
- 2 「ナイフなんかどうでもいいだろ。実際に犯人を見た証人がいるんだから……。喋るのは勝手だけど俺には仕事があるんだから。さっさとやってくれよ」

一同、黙る。

- 3 「そうだな（5に）無罪はあんただけだ」
- 5 「……提案があるます」
- 4 「何ですか？」
- 5 「もう一度投票しませんか？ ……私をのぞいて……もし有罪が11なら皆さんに従います。でも無罪票があれば話し合いますよう」
- 1 「よし、そうしましょう。反対の人はいませんね」
- 2 「何でもやってくれ！」
- 1 「用紙を……」

ビッツ 8

一同、紙切れを作り、投票。

3、集めた紙切れを1に渡す。

- 1 「（紙切れの文字を読む）有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪……無罪」

ビッツ 9

- 2 「誰だ?!」
- 3 「ほんと誰なの？」
- 4 「言えよ、裏切り者！」
- 1 「無記名投票に同意したでしょ」
- 2 「俺は分かってるぜ（1に）おい、もとの不良が環境のせいで犯罪者になったなんて、お涙ちようだいの話で無罪にしゃがって、最初は有罪だったんだろうが！」

- 1 「あんた、なぜ私だと思うんです？」
- 2 「俺にはわかるんだよ。奴を電気椅子に送ろうとしたのに（5を睨んで）おとぎ話にのりやがって……なぜ替えたんだ！」
- 1 「なぜ私だと思うんです？」

- 2 「あんたに決まってるんだよ」
1 「だからなぜ？」
2 「……（睨む）俺の勘だ」
1 「……たいしたもんですね。そう、私です」

ビッツ 10

- 2 「ほらな……」
1 「理由を聞きたくないですか？」
2 「聞こうじゃねえか」
1 「彼は一人で鬨った、有罪に確信が持てないからってね……
なかなか出来ることじゃない。その勇気を尊重して私も
無罪に入れた。有罪かもしれないけど……もっと話し合う
べきでしょ。 10対2……」

ビッツ 11

- 2 「よし、分った……（5に）あんたいいか、階下の老人の
証言では、少年が“殺してやる”と言った後誰かがたお
れる音を聞いている、老人が急いでドアを開けると奴が逃
げて行くのが見えた。これはどうなんだ？」
5 「天井越しに声が聞こえますか？」
3 「暑い夜だったから窓が開いていたんだろう」
5 「叫び声を聞き分けるには難しいんじゃないんですか？」
4 「なぜ、証言があるでしょう。向かいの女性も窓越しに殺
人を見た、それで十分でしょ」
5 「いいえ」
1 「何か確信があるなら言って下さい。その女性は6両編成
の後備の車輛越に人が殺されるのを見たと言ってます」
5 「高架鉄道がある一点を通り過ぎる時間は？ ああ、一点
と言うのは殺人が起きた部屋です。」
1 「何か関係があるんですか？」
5 「何秒だと思います、電車が通過する時間です？」
1 「さあ？」
5 「（3に）分りますか？」
3 「10秒ぐらいじゃないの？」

- 5 「そんなところでしょう」
- 2 「何のゲームなんだよ？」
- 5 「(4に) あんたは？」
- 4 「俺も10秒ぐらいだと思っけどね、それが何なんだよ」
- 5 「いいですか、6両の電車が、ある一点を、殺人現場の部屋を通過するのに10秒、窓から手の伸ばせば鉄道に届きそうな距離です……線路際に住んだ経験のある方はいます？」
- 4 「以前、高架鉄道を見下ろす部屋に住んでいたけど」
- 5 「それで？」
- 4 「窓を開けると騒音がうるさくて何も聞こえなかったな」
- 3 「それがどうしたの？」
- 5 「いいですか、二つの証言を結び付けます。まず、階下に住んでいる老人が“殺してやる”という声を聞いた直後、人が倒れる音も聞いている」
- 1 「そう言ってみましたね」
- 5 「第二に……向かいの女性は窓の外を見ていた……最後の2両越しに殺人を目的した」
- 2 「それがなんだって言うの？」
- 5 「あなたたち二人は一点を通過するのに10秒で同意しましたね」
- 3・4 頷く。
- 5 「最後の二両越しに見たなら、倒れた時、電車はちようど轟音を上げて通過中だった。被害者が倒れる前の10秒間、もう一度確認しますよ。いいですか、老人は叫び声の直後に倒れる音を聞いたと証言しています……本当に叫び声と倒れる音が聞こえていたでしょうか、電車の通過中では不可能だと思いますが、しかも老人の聴覚で」
- 2 「大声で叫んでいんだよ！」
- 5 「はたして、それは本当に少年の声だったのでしょうか……どうですか？」

一同、一瞬黙る。

- 4 「ちよっと待って……」
- 1 「どうしたんですか？」
- 4 「もし、もしですよ、あの老人が嘘をついていたとしたら……」
- 3 「嘘？」
- 2 「何だ急に……」
- 4 「老人の足取りを覚えていますか？ 老人はゆっくりと証言台へあがった。そう、左足が不自由なのを人前で隠そうとしてね」
- 3 「足が何だって」
- 4 「足をね、少し引き摺っていたんだよ。気が付かなかったか？」
- 3 「(思い浮かべ) おお」
- 5 「そうでしたね」
- 1 「確かに」
- 4 「静かで、おどおどしたどこにでもいる老人……」
- 3 「出世も出来ず。世間に認められることもなかった」
- 5 「無名で、誰の口にものぼらず」
- 4 「75年間、意見も求められずに……」
- 3 「誰かに話を聞いてもらいたい。一度だけでもいいから……」
- 4 「だから、つい……」
- 1 「重要人物になりたくて嘘をついたと言うんですか？」
- 4 「さあ、嘘ではないかも……少年の声を聞き、少年を見たと思ひ込んだ」
- 2 「お前たち、そんな馬鹿なことをよく考え付くもんだな」
- 4 「……(1に) 倍審長、無罪に変えるよ」
ばいしんちやう
- 2 「なにー？」
- 3 「聞いたろ、俺もだ」
- 2 「あややややー この野郎たち」
- 1 「9対4になりました」
- 2 「いい加減にしろよ。探偵小説でも書くのか？ 弁護士も投げ出したんだぜ」
- 3 「弁護士が頼りなかったんですよ」

4 「確かに法廷の証言では少年は有罪に思えたけど、よくよく考えりゃ、なぜ逮捕されるのに家に帰って来たのもおかしい」

2 「刺したナイフを取りに帰ったんだよ」

3 「なぜ、現場にナイフを残したんだ？」

2 「父親を殺してパニック状態で逃げ出したんだよ」

1 「そんなに慌ててましたか、指紋をふき取る冷静さはあつんですよ。それに向かいの女性の証言では、殺害の直後に彼女は悲鳴を上げている。その悲鳴を犯人は聞いていたでしょう」

5 「そう、殺人現場を見られたと思っていたはずですよ。いやパニック状態で聞こえなかったのか知れないし、父親を殺したかもしれないし、三時間後に気持ちが悪くなり着きナイフを取りにもどったかもしれません。でもそうじゃなかったら」

2 「待てよ、作り話ばかりしやがって、あの爺さんの話は嘘なんかじゃないさ。人目をひくためなんかじゃない。爺さんは確かにドアまで走って行って少年を見ているんだ」

3 「ちよつと待って、老人は“走った”って、」

2 「さあね、とにかくドアまで行ったんだ」

5 「やりましょう」

1 「何をですか？」

5 「脳卒中で足の不自由な老人が15秒で寝室から玄関まで行けるか実際に試してみたら」

2 「20秒だよ」

4 「いや、15秒と自慢げに言っていましたよ！」

2 「もうろくしている爺さんだ、信用できるか！」
一同、2を見る。

2、沈痛な顔。

ビッツ 12

5 「実験してみましよう。人が倒れる音の直後に足音がした。老人はベッドから起き、ドアを開け、15秒で玄関まで行った」

- 5 は手帖を出し、
- 5 「ベッドからドアまで3.6メートル廊下の距離は13メートル。これを15秒で歩けるか？」
- 2 「歩けるさ」
- 4 「老人にしては長い距離だと思うな」
- 5、床に椅子を置き歩数を測りだす。
- 2 「何やってんだ？」
- 5 「時間を計りましょう」
- 2 「重要なら弁護士が質問してるだろう」
- 3 「見落としたんだよ」
- 2 「国選弁護士は馬鹿だって言うのか？」
- 5 「老人いじめになると思ったかもしれませんよ。陪審員に悪い印象を与えますからね。(1に)椅子を取って貰えます……この椅子がベッド、これは寢室のドア……廊下を測ります」
- 5、歩数を測る。
- 2 「何でこんな馬鹿げたことをやるんだ」
- 5 「……玄関の位置はここ、チェーンがかかっていた……秒針付きの時計を持っている方は？」
- 1 「はい、私が……」
- 5、ベッドの位置につき、
- 5 「ここがベッド」
- 何人か椅子を並べベッドを造る。
- 5、横になる。
- 5 「ではいつでもいいですから、合図をして下さい」
- 1、時計を見つめている。
- 2 「何を待ってんだよ」
- 1 「秒針が上に来るまで……」
- 2 「まったく」
- 1 「……どうぞ！」
- 5、ベッドから起き上がり、足を引きずって歩き出す。
- 2 「もっと早く歩いてたぞ」
- 5 「わかりました」

5、少しスピードをあげる。

ドアの位置まで来て停まり。

5 「ドアチェーンを外す、ドアを開ける。ストップ、時間は？」

1 「ええと、ちょうど41秒」

ビツツ

5 「数時間前に親子の口論を聞いて、次に人が倒れる音と女性の悲鳴を聞き、玄関へ足を引きずって行き、別の人物を少年だと思った」

3 「ありえるね」

2 「馬鹿を言え！ 随分ホラ話は聞いた事はあるけど、こんな茶番劇ははじめてだよ。みんな正義に燃えてこの部屋に入ったのに……どうしたんだ！ あんな奴は死刑にすべきなんだよ」

4 「あなたは執行人か？」

2 「そうさ！ 俺が電気椅子のスイッチを入れてやるよ！」

3 「あなたを見てるとなんだか可哀相になる」

5 「わたしもそんな気がしていた……まるで復讐者のようだ」

1 「そう、だだ少年を殺したいだけだ」

5 「あんたはサディストだ！」

2、5に襲い掛かろうとする。

3、4が止めに入る。

2 「放せ……この野郎、殺してやるぞ！」

5 「……（微笑笑）まさか……本気じゃないでしょ？ あの少年も今と同じだったかも」

2 「……」

2、沈痛な思いで、一同から離れて黙る。

一同の視線が2に注がれる。

2 「……何を見てんだよ」

一同、沈黙。

1 「……みなさんは争うためにここへ来た訳ではないはずす……郵便の告知でここに来た……決めるために……そうです。その評決で私たちに損も得もありません。これが私たちの強みです……私情を交えてはいけません」と思っています」

- 3 「……どうです、また投票しませんか？」
- 1 「そうしましょう、用紙を……」
- 4 「口頭で投票しましょうよ、その方が立場がはっきりする」
- 1 「いいでしょう、反対の方は……」
- 一同、異存がないようである。
- 1 「みなさん賛成の様ですね……では私から……無罪……（居るであろう人に）あなたは？ 有罪……あなたは？……無罪……（2に）あなたは？」
- 1、評決を紙切れに書き込んで行く。
- 2 「有罪！」
- 1 「（いるであろう人に……次、3に）あなたは？」
- 3 「もちろん無罪」
- 4 「私も無罪です」
- 1 「分かりました、6対6です」
- 2 「……延長戦に突入と来たぜ」

ビッツ 14

- 2、不満をみなぎらせ窓に近づき外を見る。
- 3、2の傍らに立ち窓の外を見て、
- 3 「雨になりそうですね」
- 2 「あんた？」
- 3 「何です？」
- 2 「何で気を変えた？」
- 3 「疑いの余地うたががあります。いろいろな事実が出てきましたからね」
- 2 「考えすぎて混乱しているだけさ……同点とは驚いたな……さつきはあいつにまんまと引っかけられた……ひどいやり方だよな。俺が怒りっぽいのを知ってて……」
- 3 「復讐者ふくしゅうしやですか？」
- 2 「毘わなにはまった」
- 1 「これじゃ、評決は出なさそうですね」
- 2 「評決不能ひょうけつふんのうにしようぜ、時間の無駄だ」
- 5 「考えてみたい事があるんですが……検察は重視していましたね。犯行時間に観ていたはずの映画を少年は思い出せ

なかった。(4に) あなたもそれを指摘した」

4 「そう、唯一のアリバイなのに詳細を思い出せなかった」

5 「彼の立場になったとして、そんな時に思い出せますか…
…父親に殴られた後ですよ？」

2 「興奮状態だったとしても少しは覚えている筈だ」

5 「警察の尋問はアパートの台所で行われたんです、父親の死体がまだ寝室にある時にですよ。そんな状況で思い出せますかね？」

2 「本当に映画館に居たのなら思いだせるだろうが」

5 「そんな緊張した精神状態ででもですか？」

2 「当たり前だ」

4 「しかし、法廷では映画の内容を言えてましたよ」

2 「弁護士の入れ知恵だよ、俺は犯行直後の尋問を信じるね」

ビッツ 15

1 「ちよつと、ナイフを……」

1、ナイフを手に取り、

1 「……気になったんですが……刺し傷は下に向かって付いていたんですよ……疑問なんです少年は167・5センチ、父親は185センチ、その差は17.5センチ。それだけ身長差のある人を上から刺せますか？」

2 「よし、再現してやるからナイフを貸せ……誰か」

5、が目に入る。

2、5に近づき、

2 「いいか、つまり父親と奴の差は……？」

1 「17.5センチ」

2 「17.5センチ」

2、5の身長に合わせて低くなる。

2 「これくらいか、いいか一度しかやらないからな、よく見
てろよ」

2、思いつめたような態度から、一気にナイフを振り上げる。

一同、騒然。

2 「安心しろ、けが人は出さねえよ……」

2、ナイフを逆手に握り5にナイフを突き刺す仕種をする。

2 「どうだ、背の差なんて関係ねえ、下向きになってるだろ、奴と同じだ。納得したか」

5 「納得しませんね」

2 「何だと？」

5 「ナイフの喧嘩は嫌いですが、みなさんナイフの喧嘩を見たことありますか？」

1 「いいえ」

5 「わたしはある、育った街では名物でした。なぜ思いつかなかったのか……ナイフはこうは構えない」

5、2がやった逆手から持ち替え一同に見せる。

5 「こうはやりません、時間がかかり過ぎます……こう持つんです……そして……」

5、ナイフの使い方を見せる。

5 「……こうやる」

4 「少年はナイフの名人と言っていましたね」

5 「下から刺すんです」

2 「……よし、分かったもうウンザリだ。俺も無罪！」

1 「ちよつと待って下さい。答えになってませんよ。あなたは一体どんな人なんです？ 最初は有罪に投票した、野球の切符を持っていたからだ。ところが今度は“ウンザリ”だから無罪に変える？」

1、2殴りかかりそうな態度で近づく。

2 「なに言いてえんだ、お前は……！」

1 「人の命を弄もてあそぶ権利はあなたにはない！」

2 「お前もそんな口を利く権利はないぞ」

1 「ありますよ。無罪だと本当に納得してから票の行方を変えて下さい……有罪だと思えばそのままに……有罪か無罪かどつちなんですか？」

2 「無罪だよ」

1 「何故?!」

2 「あんたに言う必要があるのか？」

1 「あります。言って下さい……何故！」

2 「……つまり」

1、呆れる。

5 「……投票しませんか？」

1 「……分かりました」

ビッツ 16

1、一同を見渡し、

1 「無罪の人は手を挙げて……1、2、3、4、5、6、7、
8」

1、も手を挙げて、

1 「……9」

その視線が2に行く。

2、は1に睨まれて無罪に手を挙げない。

1 「有罪の人は……（いるであろう人に）1、2」

2、手をあげない。

一同の視線が2に集まる。

1、改めて2に……。

1 「……有罪の人は？」

2、震える手を挙げる。

5 「……偏見^{へんけん}抜きで物事を考える事は難しいです。偏見で真実がぼやけてしまう。真実は永遠に分からないかもしれない。しかし、9人が被告を無罪と思っている……でも、間違っているかもしれません。犯罪者を釈放しようとしているのかもしれない……3人の方にお聞きしたい、なぜ有罪だと確信を持てるんですか？（2に）あなたからお聞きしたい何故確信を……」

2 「女が見てるんだよ、それが証拠だ！」

2、イライラしてメガネを外し目の付け根辺りをさすり出す。

ビッツ 17

3 「そうだ？」

5 「どうしました？」

3 「いえ、（2に）ちょっとあなたにお聞きしたい」

- 2 「何だ？」
- 3 「……何故そんな風に鼻をこするんです？」
- 2 「少し気になるからだ」
- 3 「つまりメガネのせいですか？」
- 2 「そうだよ、もういいか」
- 3 「鼻のわきにメガネの跡が付いてますね。気になりますか？」
- 2 「ああ」
- 3 「みなさん、思い出してください。目撃者の女性ですが……あの方も鼻に同じような跡がありました。法廷で何度もこすっていましたね」
- 4 「確かにこすってた、何度も何度もね」
- 3 「彼女は60幾つとか言っていましたね」
- 1 「63です」
- 3 「63ね……公おおやけの場に出るので若作りをしていましたね。そう思いませんか？ 厚化粧で髪も染め服装も若い女性が着るような物だった。メガネをかけるのが恥ずかしかったんでしょうね」
- 2 「鼻をこすっていたからってメガネとは限らんでしょうが」
- 1 「いや、私もメガネの跡を見た」
- 4 「確かに、私は席が近かったので……跡がありました」
- 3 「メガネ以外にそんな跡が付きます？」
- 2 「分かったメガネの跡だとしよう。いいか、若く見せたくて、外出がいしゅつの時はかけなかったとしよう。しかし、殺しを見たときは一人で家に居たんだ」
- 5 「確かに一人でいる時は、若ぶらなくていい。しかし寝ようとしている時ですよ？」
- 1 「メガネをかけて寝る人はいないでしょう。誰だつてそうだ」
- 5 「もちろん外していたでしょう」
- 2 「何故分かる」
- 5 「推測すいそくです……彼女は何気なく外を見たと言ってます。メガネは外していたでしょう。外を見たとたん殺人が起きた、メガネを掛ける余裕はありませんよね。彼女が見たという

少年はぼやけて見えてた筈です」

2 「何故そんなことが分かるだよ。彼女は遠視だったとしたら……サングラスの跡かもしれないだろ」

1 「18メートルも離れている人間を夜間に確認できる何て……そんな人がいますかね？」

5 「(居るであろう人物に) どうです、これでも少年は有罪ですか？ 分かりました。(別の居るであろう人物に) あなたは？ (頷く)」

1 「……これで無罪は十一です」

5 「(2に) あなた一人だ」

2 「構うもんか、これは俺の権利だ！ 法廷での証言の何もかもが証拠だ！ 奴は有罪に間違いない。下に住んでいる爺さんがみんな聞いたんだ……同じナイフがあつたからどうした。秒数なんて関係ねえ……何もかもだ！ お前たちの話はみんな大嘘だ！ 事実をねじ曲げやたって！ メガネを外した女も宣誓せんせいしたんだぞ！ あの不良は死ぬべきなんだ……いいか、子供なんか信用するなよ……子供なんか信用すると……子供なんか……畜生！」

2 は床に泣き崩れる。

一同、憐れむような眼で彼を見つめていたが、彼の周りに集まる。

嗚咽の中で2が……、

2 「……無罪……無罪だよ……あの子は無罪だ」

深いF・O

2018.4.8.sun

完